英国国内旅行 ～ノーサンバーランド～

今年（2026年）のロンドンの夏はものすごく暑かった。私の家は冷房がないので、日中の焼けるような暑さと夜の寝苦しさには本当に堪えた。BBCによると、気象庁は2026年夏（6月～8月）は英国で記録上最も暑い季節になり、日中と夜間の平均気温は16.5℃、これは1884年の統計開始以降最も高い気温だったそうだ。

また、今年のロンドンは雨が降る日数が少なかったと感じる。実際にウェールズ全域とイングランドの3分の2以上で干ばつが宣言され、水を供給するテムズ・ウォーターも各家庭に対して、ホースの使用を自粛するようにと通知されたほどだ。

ロンドン生活4年目の私は昔の夏の気候を知らない。知人や同僚によると、こんな暑さは20年前にはなかったと口を揃えて言う。それが結果として一般家庭と地下鉄の冷房完備率が低いことにつながるわけだが。

前置きが長くなってしまったが、私は8月に1週間の休暇を取ることができた。ロンドンの暑さから一刻でも早く脱出してのんびり過ごしたいと思っていた私は、1週間分の荷物を積んで車に飛び乗り、一路北に向けて出発した。

目的地はノーサンバーランド（Northumberland）。イングランドの最北に位置し、スコットランドと国境を接し雄大な自然と絶景を有する場所だ。朝10時にロンドンを出発した時には既に気温が30℃に達していたが、北に移動するにつれ気温が下がっていき、18時頃にノーサンバーランドの街、ヘクサム（Hexham）に到着した時の気温は15℃だった。同じ国でもこんなに気温差があるのかと驚きつつ、出発前にクロゼットの奥からわざわざ出してきた上着を羽織って、スーパーで買い物をした。今回はコテージに宿泊するので到着前に食材の買い出しが必要だ。スーパーの中はこの寒さにも関わらずなぜか冷房が効いており、地元住民の体温調節機能は一体どうなってるんだと驚きつつレジへ。半袖の店員さんにこの気温は普通なのかと聞くと、暑い日が増えてきているが夏はだいたいこんな気温よと笑顔で言われた。会計を済まして、まだまだ明るい英国の日差しを浴びながらコテージへ向かった。



コテージはベリンガム（Bellingham）という田舎にある。アップダウンの激しい英国特有の丘陵地帯とたくさんの羊を見ながら北に車を走らせること約1時間。無事コテージに到着した。名前は「Railway Cottage」。元々この街に鉄道が走っていた時にちなんで名づけられたと思われる。私はこの地を拠点にしてノーサンバーランド周辺を見て回ることにした。

発行: 日本クラブ会員サービス･イベント委員会
原稿： ジャルパック TEL: 020 3034 4201 Email: lonkso@jalpak.co.uk HP: jalpak.co.uk
日本クラブ TEL: 020 7921 9490 Email: jimukyoku@nipponclub.co.uk HP: nipponclub.co.uk

コテージはベリンガム（Bellingham）という田舎にある。アップダウンの激しい英国特有の丘陵地帯とたくさんの羊を見ながら北に車を走らせること約1時間。無事コテージに到着した。名前は「Railway Cottage」。元々この街に鉄道が走っていた時にちなんで名づけられたと思われる。私はこの地を拠点にしてノーサンバーランド周辺を見て回ることにした。



まず最初に訪問したのはアニック城。11世紀に要塞として建設されたのがルーツで、現在も公爵一家が暮らしているカントリーハウスである。この城が有名なのは映画ハリーポッターシリーズのホグワーツ魔法学校のシーン等、数多くの映画の舞台になったことが大きい。実際職員や警備の方にこのシーンはどこで撮影されたのかと聞くと、撮影位置やどのように撮影されたのかを事細かに教えてくれた。その後写真をたくさん撮ったのは言うまでもない。



もちろん入場可能時間が限られているが、城の内部も見学可能だ。ここの面白いところは見学ルート。最初は公爵一家が過ごす豪華絢爛なステートルーム（The State Room）を見て、その後は使用人の部屋がある廊下を経由し、現在は使われていない大きなキッチン（The Great Kitchen）と続くのだが、やはり城の表と裏を同時に見ることができるのは非常に興味深い。映画の舞台だけでなく英国貴族の本物の暮らしを間近に感じられるスポットなので、ぜひ訪れてほしい。





発行： 日本クラブ会員サービス･イベント委員会
原稿： ジャルパック TEL: 020 3034 4201 Email: lonkso@jalpak.co.uk HP: jalpak.co.uk
日本クラブ TEL: 020 7921 9490 Email: jimukyoku@nipponclub.co.uk HP: nipponclub.co.uk

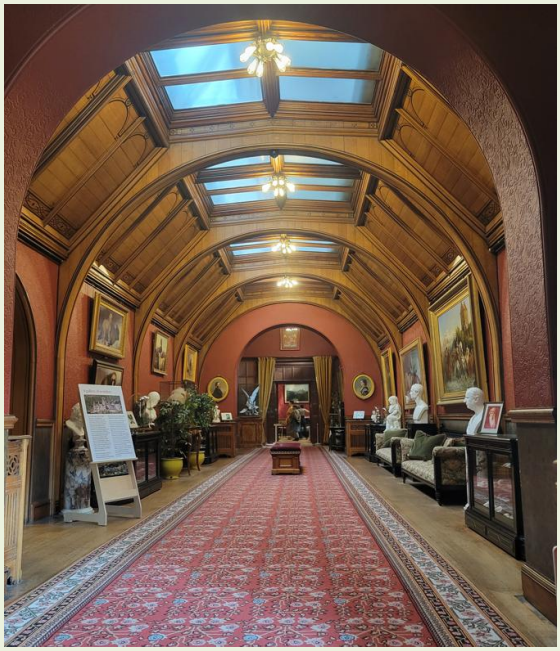
次に向かったのはハドリアヌスの城壁。英国にある世界遺産の一つである。古代ローマ時代に建設されたこの城壁は全長およそ120km。元々はローマ帝国内に侵入する人を防ぐために作られたのだが、その遺跡が今もなお残されている。現存している城壁を全て見るには時間がかかりすぎるので、私は城壁のほぼ真ん中に位置するSteel Rigに車を止めて周辺を散策することにした。

まず驚いたのは、思った以上に広大な丘陵地帯に石の城壁が地面を這うようにそのまま残されていることだ。周辺に建物が全くないのでまるでタイムスリップした気持ちになった。写真の通り高低差がかなりあり、階段も急こう配で、手すり代わりに付近の石をつかまないと登れないところが多い。城壁沿いを歩くだけでも一苦労だったが、道中羊に遭遇して癒されたり城壁の高いところから写真を撮ったりして飽きることは全くなかった。

さて、ハドリアヌスの城壁の他に、もう一つ訪れてみたい場所があった。それはシカモア・ギャップ・ツリー（Sycamore Gap Tree）である。草原と城壁だけの環境に唯一残っている木として、ノーサンバーランドの象徴の一つだった。ロビンフッド等の映画にも登場し多くの人に親しまれていたが、2023年9月。何者かによって突如としてチェーンソーで伐採されてしまった。当時英国では大々的にメディアに取り上げられ、その後実行者は逮捕され、実刑判決が確定したのだが、当然伐採された木が戻ってくることもないし、すぐに成長することはない。しかし私はそこに木があったという事実をこの目で見たいと思い、駐車場から45分歩いてようやくたどり着くことができた。



そこにあったはずの大きな木は、もうない。木の幹はフェンスに囲われていた。伐採されてからおよそ3年。木の幹からは新しい芽が出ていた。何百年もの間、この土地と共に歩んできた歴史が二人の身勝手ないたずらにより一瞬で奪われたことに憤りを覚えた。伐採前の木はweb上で見ることができる。なぜこの木が多くの人をひきつけたのかをすぐに理解できるはずである。



次にクラッグサイド（Cragside）。ここは英国の発明家の一人、ウィリアム・アームストロング（Load Armstrong）の邸宅として作られた。この邸宅のすごいところは、140年以上前の1880年に世界初の水力発電で作られた電力で電気を利用していたということだ。いまでこそオール電化の住宅がかなり増えているが、その元祖ともいえる原型が既に19世紀に確立されていたとは、当時の英国の技術の凄さを物語っている。

その他にもこの建物は日本とのかかわりが深い。というのも、ウィリアム・アームストロングは明治時代以降に日本に武器の輸出を行っており、日本からの要人がこの邸宅に多く足を運んでいたそうだ。実際に邸宅の中には日本のものであろう

発行： 日本クラブ会員サービス･イベント委員会
原稿： ジャルパック TEL: 020 3034 4201 Email: lonkso@jalpak.co.uk HP: jalpak.co.uk
日本クラブ TEL: 020 7921 9490 Email: jimukyoku@nipponclub.co.uk HP: nipponclub.co.uk

コレクションが数多く置いてある部屋があり、浮世絵やたくさんの美術品を見ることができる。

さらに、応接間には当時皇太子だった上皇様のサイン入り写真が置いてあった。館内スタッフに聞いたところ、1953年エリザベス女王の戴冠式にご出席される際にこの邸宅に1週間ほど滞在されたとのこと。ノーサンバーランドに日本と深いつながりのある場所があったとは非常に驚いた。その他、クラッグサイドの広大な土地を一周して大自然を車に乗って楽しめる約6マイルのドライブウェイ（Carriage Drive）やガーデン（Rock Garden）、ハイキングコース等、見どころが多くある。ナショナルトラストの会員であれば、入場料無料で邸宅に入ることができるので、ぜひ足を運んでいただきたい。



最後に訪れたのはホーリー・アイランド（Holy Island）。ノーサンバーランド北東部にあり、その名の通り島である。この島の面白いところは時間帯によって車で上陸することができることだ。英国の幹線道路A1から始まるホーリー・アイランド・コーズウェイ（Holy Island Causeway）は、干潮時に道路が現れ、その間は車で自由に行き来することができるのだ。もちろん満潮時は道路自体が完全に海に沈んでしまうので、上陸前に公式サイトに載っている通行可能時間表を確認しなければならないが、なんとも面白い道路である。

上陸後はリンディスファーン城（Lindisfarne Castle）という16世紀の要塞に訪問することができる。スコットランド国境に近いこの城には一時期大砲が設置される等、歴史的・政治的にも重要な拠点の一つであった。

その後20世紀に入ると、城の大改装が始まり、なんと別荘として生まれ変わったのだ。内部は見学可能で、要塞としての雰囲気を少し残しつつも、ベッドやテーブル等の家具や暖炉が設置されており、元要塞感と生活感がうまい具合にマッチしている内装は非常に興味深い。

ホーリーアイランドの駐車場からリンディスファーン城までは徒歩15分ほどであるが、道中は気持ちのいい海風にあたりながら、海岸線を歩いていくので、ちょっとしたハイキングにも最適だ。リンディスファーン城もナショナルトラスト会員であれば無料で入場することができる。

他にも紹介したい場所があるが、ここまでノーサンバランド滞在中に訪れた代表的な場所を紹介した。冒頭にも書いたがロンドンの暑さから逃げてのんびり過ごしたいというのが本来の目的だ。観光地の訪問以外はコテージでのんびり過ごし、食事は自炊か近くにあるカントリーパブで美味しい料理を食べ、地元の人の温かさに直に触れることができ、都会の喧騒を忘れて、優雅で穏やかな時間を過ごすことができた。せっかくの休暇に、より多くの観光地を訪れるのもいいが、仕事を忘れてのんびり過ごすことこそが本当の休暇なのではないかと再認識する旅となった。旅の最終日にロンドンに戻りたくなくなったのは言うまでもない。

ジャルパック　上口直人

発行：日本クラブ会員サービス･イベント委員会
原稿：ジャルパック　TEL: 020 3034 4201　Email: lonkso@jalpak.co.uk　HP: jalpak.co.uk
日本クラブ　TEL: 020 7921 9490　Email: jimukyoku@nipponclub.co.uk　HP: nipponclub.co.uk